AL NEWSLETTER
アクティブラーニングニュースレター
Volume 9, No. 1
June 2023

～ 目次 ～

◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
◆ EX 部門（旧アクティブラーニング部門）活動報告
・ アクティブラーニング型授業モデルの開発(p.1)
・ ワークショップの開催(p.4)
◆ 今後の活動予定(p.5)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングは駒場アクティブラーニングスタジオ（KALS、東京大学駒場キャンパス 17 号館 2 階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとりいれる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。気になる記事がありましたら、東京大学教養学部附属教養教育高度化機構 Educational Transformation(EX)部門（旧アクティブラーニング部門と初年次教育部門・自然科学教育高度化部門が統合する形で 2023 年 4 月に新設）までお問い合わせください。（若杉）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつかなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（若杉）

◆ EX 部門（旧アクティブラーニング部門）活動報告

2022 年度後半の旧アクティブラーニング部門の活動を紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

EX 部門では、授業の開講を通 して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。2022 年度 A セメスターは、4 授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

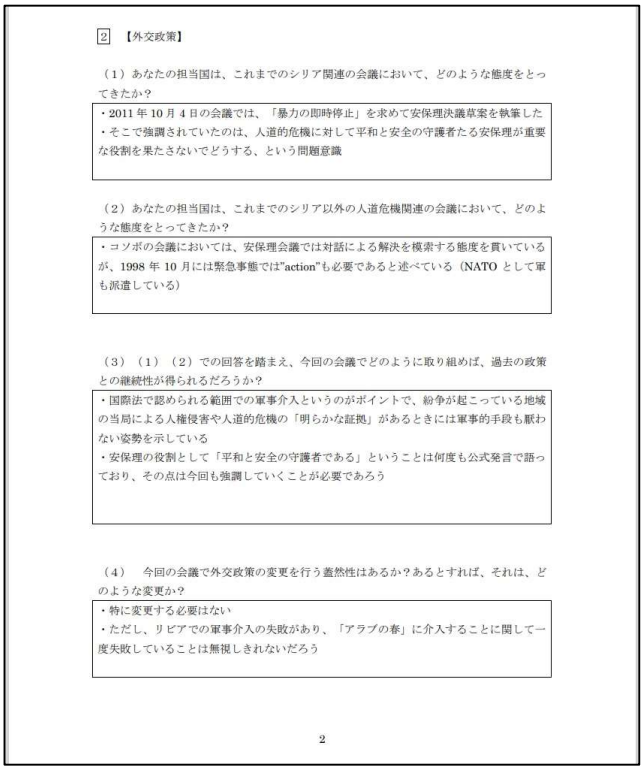
(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 II

「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 II」（担当教員：中村長史）では、模擬国連（Model United Nations）というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題の解決法を考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合います。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。この点を重視し、授業内では対立の激しい議題・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。2019 年度より毎学期開講しており、今回は 7 期目の開講となりましたが、受講者は 15 名（1 年生 8 名、2 年生 5 名、3 年生 1 名、4 年生 1 名）でした。

授業は、2 部構成としました。第 1 部「シリアの人道危機」（第 2～7 回）では、2010 年代を通して続いているシリア人道危機についての国連安全保障理事会のシミュレーションを行ないました。第 2 回で議

題概説を行ない、担当国を決定した後、第3回から第6回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（シリア政府擁護派）、フランス（シリア政府批判派）、ロシア（擁護派）、英国（批判派）、米国（批判派）の5つの常任理事国に「中間派」の南アフリカを加えた6ヶ国を設定し、1ヶ国を2・3人で担当しました。現実の会議と同様、拒否権が行使され、決議案は廃案となりました。

第7回では、まず、このような会議の内容について、担当国の立場から振り返り、自国の利益をどの程度反映できたか、より適切な政策立案・議論・交渉等はなかったかを検討しました。そのうえで、個人の立場から会議を振り返り、国際社会全体の利益のために、どのような方法があり得る（た）のかを議論しました。2つのふりかえりを踏まえて、受講者は授業外でレポート1に取り組みました。



2 【外交政策】

（1）あなたの担当国は、これまでのシリア関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・2011年10月4日の会議では、「暴力の即時停止」を求めて安保理決議草案を執筆した
・そこで強調されていたのは、人道的危機に対して平和と安全の守護者たる安保理が重要な役割を果たさないでどうする、という問題意識

（2）あなたの担当国は、これまでのシリア以外の人道危機関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

・コソボの会議においては、安保理会議では対話による解決を模索する態度を貫いているが、1998年10月には緊急事態では"action"も必要であると述べている（NATOとして軍も派遣している）

（3）（1）（2）での回答を踏まえ、今回の会議でどのように取り組めば、過去の政策との継続性が得られるだろうか？

・国際法で認められる範囲での軍事介入というのがポイントで、紛争が起こっている地域の当局による人権侵害や人道的危機の「明らかな証拠」があるときには軍事的手段も厭わない姿勢を示している
・安保理の役割として「平和と安全の守護者である」ということは何度も公式発言で語っており、その点は今回も強調していくことが必要であろう

（4） 今回の会議で外交政策の変更を行う蓋然性はあるか？あるとすれば、それは、どのような変更か？

・特に変更する必要はない
・ただし、リビアでの軍事介入の失敗があり、「アラブの春」に介入することに関して一度失敗していることは無視しきれないだろう

2

学生が作成したPolicy Paperの例（会議前の準備）

第2部「女性、平和、安全保障」（第8～12回）では、「テーマ別会合」（国連安全保障理事会では、シリアのような特定の事態のみならず、「テーマ別会合」と呼ばれる一般的な議題も扱われます）の一つである「女性、平和、安全保障」のシミュレーションを行ないました。第8回で議題概説を行ない、担当国を決定した後、第9回から第11回まで会議を行ないました。実際の国連安全保障理事会の構成国のうち、中国（現実世界では棄権）、フランス（賛成）、ロシア（棄権）、英国（賛成）、米国（賛成）の5つの常任理事国にドイツ（賛成）、インドネシア（賛成）を加えた7ヶ国を設定し、1ヶ国を2・3人で担当しました。多様な文化・宗教・利害を持つ国々の間でリプロダクティブヘルス/ライツや、安保理で人権問題を話し合うことの是非等をめぐって議論・交渉が繰り広げられましたが、現実世界とは異なり、全会一致で決議案が採択される結果となりました。第12回では、シリアの際と同様、担当国の立場と個人の立場から、それぞれふりかえり、授業外でレポートに取り組みました。

第13回のまとめでは、各自が模擬国連から学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「西側と東側など、どうしても簡単な構図を思い描いてしまうが、実際はもっと多様な立場があり、一枚岩では無いことを学んだ」、「各国首脳の演説について今までは抽象的で曖昧な発言と思っていたが、リサーチをしてみると、その演説のなかにその国の方針や思惑が反映されていることを学んだ」、「全ての国が自国の利益を最大化しようとするとどうしても議論が平行線になってしまうことがあるということを学んだ。そのため、合意を形成するためにはお互いがボトムラインを基準に多少の妥協を行う必要があると感じた」、「ただ国際関係や合意形成について学ぼうとするよりも、ある特定の国の大使の立場に立って会議に参加することで、より深くそれらを学ぶことができると感じた。Policy Paperも多様な価値観を意識しながら作成することができたので国際関係の理解に役立った」といった感想が寄せられました。これらの感想ならびにレポートの内容から察するに、授業の目的が一定程度達成されたようであり安堵しました。

一方、「ホワイトボードで行った振り返りに加えて会議後などの他国のPolicy Paperを参照できると、議題についての多面的な捉え方がより深まり学習効果がより大きかったかもしれない」といった意見も寄せられました。教員としてもなるほどと思わされる提言であり、2023年度の授業で早速採り入れてみたいと考えています。（中村）

(2)全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 国際紛争ケースブックをつくろう

「国際紛争ケースブックをつくろう」（担当教員：中村長史）では、複数の国際紛争の経緯や構図、原因等についてグループで調査し、最終的にケースブックを作成することを目指しました。その過程で、ある国際紛争に対する見方は決して一様ではないことに気づき、できる限り客観的に各紛争を捉えるための方法を習得してほしいと考えました。担当する紛争の5W1H、すなわち主体（who）、争点（why）、時期区分（when）、民族・宗教・政治体制・経済状況（where）、当事者・第三者の行動（what & how）について正確に理解するために複数の文献・資料にあたって丁寧に情報収集をするのはもちろんのこと、他の紛争を担当するクラスメイトとの意見交換を通じて、紛争間の関係性や前例が後例に与える影響についても学ぶことを期待しました。2020年度以来開講しており今回が3度目の開講

となりましたが、受講者は 12 名（1 年生 7 名、2 年生 2 名、3 年生 2 名、4 年生 1 名）でした。

授業は、2 部構成としました。第 1 部「ケースブックの改訂」（第 2～7 回）では、いきなりケースブックをゼロから作ることは難しいので、まずは練習として、昨年度の受講生が作成したケースブックの改訂から始めることにしました。ソマリア、ルワンダ、ボスニア、アフガニスタンの 4 つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TA からのフィードバックを繰り返し、ケースブックの改訂を進めていきました。第 7 回では、グループごとに、その最終成果を報告しました。

第 2 部「ケースブックの作成」（第 8～12 回）では、改訂作業で学んだことを踏まえて、ケースブックをゼロから作る段階へと入っていきました。イラク、東ティモール、ミャンマー、シリアの 4 つの紛争を扱うグループに分かれ、グループ内・グループ間のディスカッション、教員・TA からのフィードバックを繰り返し、その最終成果を第 12 回で報告しました。改訂作業の段階に比べて、事例（紛争）間の関係にも目を向けるグループが多くなるなど、確かな成長が感じられました。

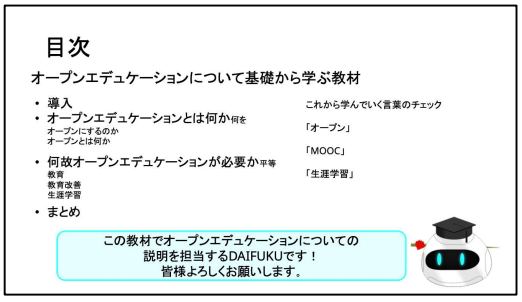
第 13 回のまとめでは、各自がケースブックづくりから学んだことについてふりかえりました。受講者からは、「前後に起こった異なる紛争間の関係を学ぶことができて印象深かった。大局的な視点・細かい視点を両方持ち合わせてバランス感覚を持ってまとめることが重要だと感じた」、「紛争を考えるとき、どんなに複雑な紛争を考える上でも、５Ｗ１Ｈに立ち返ることで整理することができることを学んだ」、「紛争の分析の手法（5W1H）を今後も活用できると感じました」、「ミクロレベルから多面的に把握するために、今後は社会心理的な側面(憎悪の増長など)を勉強したい」といった感想が寄せられました。所期の目的が一定程度達成されたものと安堵するとともに、2024 年度以降（2023 年度は別授業を開講予定）に向けてさらなる改善を図っていきたいと考えています。（中村）

(3) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 「オープン教材」をつくろう！

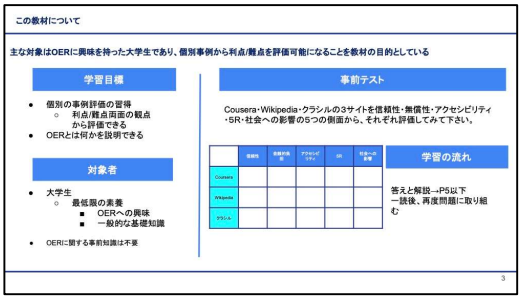
「『オープン教材』をつくろう！（担当教員：中澤明子）は、2021 年度 A セメスターに引き続いての開講でした。本授業では、まずオープンエデュケーションやオープン教材の定義・特徴・事例に加えて教材設計理論を学びます。その後、オープンエデュケーションやオープン教材について学べる教材を作り、オープンエデュケーションやオープン教材についての理解を深めます。

2022 年度の授業では、教材づくりに入るまでのオープンエデュケーション、オープン教材に関する概論パートで、授業で扱った内容や自分で調べた内容をまとめるコンセプトマップ作成を取り入れました。2021 年度の授業では、前半の概論パートと、後半の授業づくりとが分離しているように思われたため、橋渡しの目的で取り入れました。受講生一人ひとりが miro（https://miro.com/ja/）でボードを持ち、そこに授業で扱った内容のキーワードや事例などを書き込みました。第 13 回の授業終了時、受講生にアンケート調査を行ったところ（回答者 20 名）、「授業の前半で使用したコンセプトマップは、教材づくりで役立ちましたか」については、とても役立った 5% 、ある程度役立った 60%、あまり役立たなかった 35%という結果が得られました。その理由として「自身の理解を記録しておくことで講義スライドにはない授業での情報についても考慮することができたから」、「何を教材で扱うか洗い出す作業の際見返すことで、大事だと自分が思ったポイントを簡単に思い出せたから」といった肯定的な意見が見られた一方、「考えの整理には使えたが、更新する癖があまりつかなかった」、「コンセプトマップを見るというよりもスライドや資料を見直すほうが個人的に好きだったため」という使用しなかった理由が挙げられました。前半・後半の接続のためにコンセプトマップを取り入れたものの十分に機能していなかった点が見られたため、授業設計や取り入れ方を見直して、改善できればと思います。

また、受講生が作成した教材を部門ウェブサイトで公開しました。 至らぬ点もあるかと思いますが、ぜひご覧いただき、またご自身のオープンエデュケーションに関する学習に役立てていただけますと幸いです。https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/classes/student-report/a3718/ （中澤）



学生が作成した教材①（By 中村莉久 CC BY NC4.0 ）



学生が作成した教材②
（By Y, AG, 福井雄真, たつき CC BY NC4.0）

(4) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 未来の学びを考える【理論と事例編】

「未来の学びを考える【理論と事例編】」（担当教員：中澤明子）では、教育・学習について過去や現在の状況を理解した上で、10 年後の未来の学びがどうなるかを自分なりに考えること、そしてその過程で自身の教育・学習経験をふり返って教育・学習の理論に位置づけることを目的としました。第 2 回～第 5 回の授業では、教育・学習の理論やトピックの資料を扱い、ジグソー法で読解・相互説明した後、問いについて議論しました。第 6 回～第 8 回の授業では、学びの事例を知ることをテーマに、学校現場の先生や研究者によるゲスト講義を行いました。第 9 回では自身の教育・学習に関する経験を、ブロックを使って可視化して相互に説明した後、それまでの授業で扱ったトピックや事例との関連づけを行いました。その後の授業では、グループでの議論や最終発表を行いました。

最終発表は、4 つのグループそれぞれが「2032 年の学びについて、どこで、誰が、何を、どうやって学んでいるのか」を発表しました。未来の通信制高校での学び、子どもたちが興味を持ってワクワクしながら学習できる未来の学び、受動的な授業を乗り越えるための未来の学びの授業案、VR を使った未来の学びの風景といった発表がなされました。どのグループも、授業で扱ったトピックを踏まえながら、自分たちで調べ議論した内容を発表していました。

13 回の授業終了時、受講生にアンケート調査を行いました（回答者 13 名）。学生からの感想では、「授業内容で扱う事例、理論のようなものを授業自体で体験することができた。教育を学びながら教育を体験することができた。」、「最後の発表は各班、違った内容の発表で面白かった。多様性を感じた」などが挙げられました。授業の改善点としては「発表の準備や発表時間がもう少しあれば、より具体的なところや案の課題に対する解決策のようなものを考えられる（発表できる）かと思いました。」などが挙げられました。改善点は、次年度以降の授業設計に活かしたいと思います。

また、2021 年度と同じく第 2 回～第 5 回はジグソー法を用いました。事前学習を伴う実践と、授業中にすべてを実施する実践とを行い、それぞれに対する学生の認識を確認しました。その結果、事前学習を伴う実践のほうが学習効果があると感じる一方で、好むのは授業中にすべて行う実践というオンライン授業と同様の傾向が明らかになりました。この内容を日本教育工学会 2023 年春季全国大会にて口頭発表しました。（中澤）

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワーク ショップを企画しています。

2023 年 3 月、次の 2 つのワークショップを開催しました。これらについて簡単にご報告します。 なお、詳細については、部門 web サイト（https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event/）をご覧ください。

駒場アクティブラーニングワークショップ「ジグソー法を授業で活用する」（2023 年 3 月 17 日）

東大で授業を担当されている先生方を対象に、駒場アクティブラーニングワークショップ「ジグソー法を授業で活用する」を対面で開催しました。当日は 10 名の方が参加されました。本ワークショップでは、アクティブラーニングの手法の一つとしてよく知られるジグソー法を取り上げ、ジグソー法の基本的なやり方や効果、アクティブラーニング部門が開講した授業でのジグソー法導入の実例に関する情報提供をしました。また、ご自身の授業で活用することについて検討を行いました。

アクティブラーニングの授業モデル開発として部門開講授業で検討してきたジグソー法の手順に則って、ワークショップそのものもジグソー法を用いて実施しました。具体的には、①個人での問いの思考、②資料の読解、③エキスパート活動（資料ごとのグループで内容の確認、説明内容の検討）、④ジグソー活動（担当資料の相互説明、問いに関する議論）、⑦個人での問いの思考 という手順で休憩やミニレクチャを挟みつつワークショップを進めました。

エキスパート活動の様子

資料は、ジグソー法の背景、バリエーション、効果・メリットの三種類を用意しました。「どのような目的・場面でジグソー法を活用できそうか」という問いについて、①・⑦の個人での問いの思考、④ジグソー活動でのグループの議論 を行いました。ジグソー活動での議論内容を全体で共有した後、ミニレクチャではジグソー法の活用の実例として、部門開講授業での事例を紹介しました。その後、⑦個人での問いの思考 では、参加者自身の授業について、どのような目的・場面でジグソー法を活用できそうかを思考してもらい、その内容をグループで共有しました。最後に、ワークショップのふり返りとしてジグソー法について新しく知ったことを書き出してもらいました。

ワークショップ後のアンケート（5 名が回答）の結果を簡単にご紹介します。「今後の授業準備・実施に役立つものでしたか」、「本ワークショップで扱った内容をご自身の授業で活用できると思いますか」については、とてもそう思うが 3 名、そう思う

1名、どちらとも言えない1名という回答でした。「本ワークショップへの参加を周りの教員に勧めたいと思いますか」に対しては、とてもそう思う3名、そう思う2名でした。全体的に好評価を得たと考えられるものの、「本ワークショップは、ご自身の授業準備・実施に関連していると思いましたか」という質問について、そう思わないという回答が1名ありました。ご自身の授業目的を踏まえた検討の結果、このように感じられたのかもしれません。

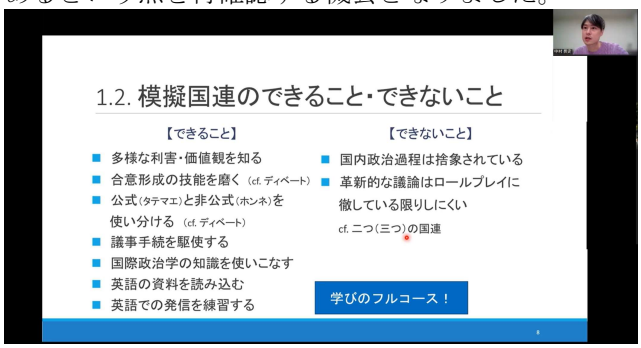
ジグソー法は、分野を問わず活用可能な手法です。また、学生による発表をジグソーグループの枠組み（異なるグループのメンバーから成るグループで発表）で行うこともできます。授業目的や学習目標に応じて授業手法の選択をすることは当然ではありますけれども、その授業手法の選択肢としてジグソー法を加えてみてはいかがでしょうか。（中澤）

ふり返りワークの様子

第6回 模擬国連ワークショップ（2023年3月24日）

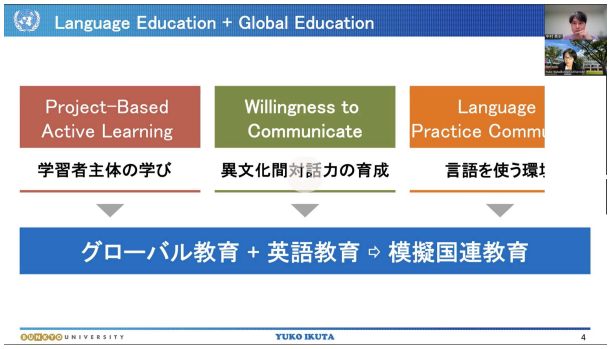
本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール／高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成」を踏まえて開催したものです。学内外の大学・高校教員を対象として2019年度から実施しており、今回が6回目となりましたが、37名の参加者が画面越しに集いました。

ワークショップは2部構成としました。セッション1「模擬国連導入事例から学ぶ」では、模擬国連の概要と本学教養学部の授業への導入例について中村からお話しました。導入目的を明確化する必要があるという点を再確認する機会となりました。



セッション1の様子

セッション2「英語での模擬国連導入事例から学ぶ」では、生田祐子先生（文教大学国際学部）から、英語で模擬国連を実施する場合の留意点について具体例とともにご紹介いただきました。言語（英語）教育をご専門に研究されている立場から、国際社会における言語観を踏まえ、「リンガフランカとしての英語」を模擬国連を通して学ぶことを意識しているとお話になったのが印象的でした。セッション1で紹介した中村の授業とはまた異なる目的を明確に持っていらっしゃる生田先生の授業事例をご紹介いただいたことで、各人の導入目的や環境に合った「Taylor-madeの模擬国連」を目指そうという本ワークショップの趣旨が一層クリアになったように思われます。



セッション2の様子

参加者からは、「Taylor-madeの模擬国連という考え方を教わったことで、授業にどのように模擬国連を取り入れたいのか、自分なりに考えることができるようになった」、「模擬国連以外の方法も学んだことで、自分のやりたいこと（目的）を達成するためには必ずしも模擬国連だけが最適の方法ではない、ということもわかりました」といった声をいただきました。こうした声を励みに、2023年度も実施していく所存です。（中村）

◆ 今後の活動予定

2023年度Sセメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また9月に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト（https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/）で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

（奥付）
○発行年月日：2023年6月30日
○発行：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 EX部門
若杉桂輔・中澤明子・中村長史
○連絡先：dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
○Webサイト：https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/